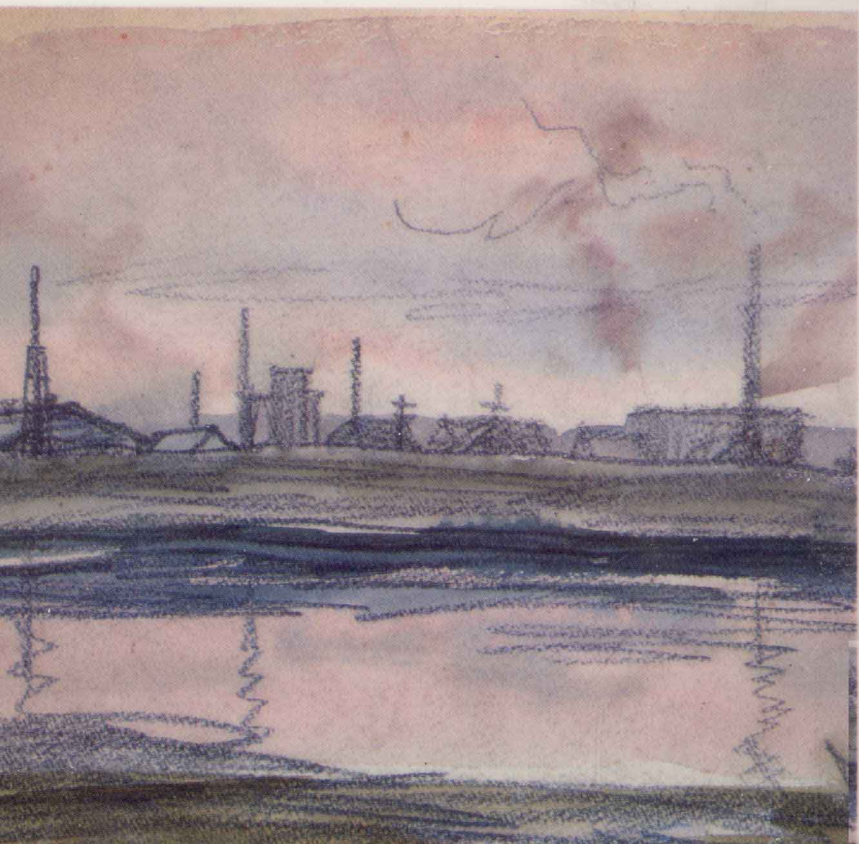


早乙女勝元

小説選集

6

火の瞳



早乙女勝元小説選集

6

火の瞳



早乙女勝元小説選集・6

火の瞳

1977・初版

作者 早乙女勝元 ©

画家 久米宏一



制作 小宮山量平

発行 山村光司

株式会社 理論社

東京都新宿区若松町一五・六

電話 〇三三〇五七九一

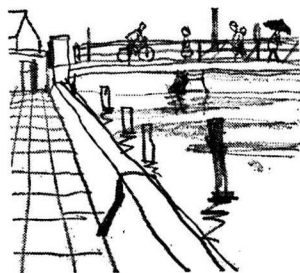
振替 東京九一九五七三六

B 6 冊 272 P 0393-90906-8924

一九八四年九月第六刷

火 の 瞳





ブローグ	3
警報発令	6
落下傘がおりてくる	26
鉄のきば	45
潜水号地下へ	61
おりの中	82
火の川のながれ	102
じごく脱出	126
焼けあとの探険	148
くらやみの火	168
あ、かあちゃんだ	190
こがらし	215
うらの原っぱで	238
エピソード	261
てのひら自叙伝へ6	269
カバー絵・カット	
久米宏一	

■ プロローグ

昭和二十年（一九四五年）二月の末、そのころ「帝都」とよばれた東京に大雪がふった。——といっても、なにしろひとむかしも前のことだ。どんな記憶のいいひとでも、そうそうおぼえていられるはずがない。

しかし、それは、じつに四十年ぶりの大雪といわれて、当時のひとびとを、おどろかせたものだった。

雪は、二日二晩にわたって、花びらのようにふりつづき、道をうすめ、屋根をうすめ、いつもくろぐろとこりかたまって見える町を、まっ白な一まいのじゅうたんでおおった。雪は、こんなにも白いものだったろうか。道も電柱もえんとつも、すべてが、銀白の色におおわれ、学校のマツの木は、ふっくらと、大きな「わたがし」のようにもりあがった。

朝、空に小鳥がさえずり、小イヌが、よろこびいさんで雪の上をかけまわるとき、四十年ぶりの大雪よりも、さらにおどろくべきことがおこっていた。記憶のうすれぬうちに、そのことを、かきとめておかねばならない。

たった一晚のうちに、二万戸からの家が焼けて、七万人ものひとびとが、住む家をなくし、とうてい、かぞえきれないほどの死傷者が出たのだ。

大雪の被害だろうか。ちがう。それでは火事。いや、火事といっても、ふつうの火事ではない。そのしょうくに、ラジオのスイッチをいれると、「大本営発表」のアナウンスが、つぎのようにながれてきたのである。

「本二月二十五日未明、敵、機動部隊より艦載機のべ六百機、関東地方に來襲せり。べつに同日午後、B 29 百三十機、主として、帝都に侵入、雲上より盲爆せり……。」

そのための被害は、下谷・浅草・本郷・向島・赤坂・深川・葛飾・江戸川・城東・荒川などの各区にわたり、とくに神田錦町などでは、一町内で焼夷弾六百発、爆弾数十発をうけ、たちまちのうちに、七千六百戸をうしなってしまった。

四十年ぶりの大雪はわすれても、この雪の夜の空襲をおぼえているひとは、すくなくないにちがいない。

ああ、そのころは、「進め一億火の玉だ」といわれて、太平洋戦争もおわりに近く、津波のようにおそってくる、米機の空襲のもとに、あけくれる日々のつらなりだった。津波なら、たまにしかないから、ふせぎようもあるし、にげることもできる。

しかし、空襲のほうは、そんな、なまやさしいものではなかった。

昭和十九年七月、サイパン島が、米軍の手にわたってからというもの、マーシャル群島に、基地をかためた米空軍は、大型爆撃機 B 29 を主力にして、ほんの一またぎで、東京の上空へやってくるようになったのだ。サイパン〜東京間は二千二百八十キロもあるが、そのくらいのきよりは、B 29 にとって問題ではない。

夜も昼も、ひっきりなしにやってくる。

ふつうでも、一日に二回、多いときには、三回から五回も、空襲警報のサイレンがなりひびいて、日本じゅういたるところに火の雨がふった。もっともひどいときには、B 29 が、一日に、五百二十機も来襲、四百五十トンもの焼夷弾をおとした。いや、艦載機などは、千三百機をこえる数が、一日のうちに来襲したこともある。

ひとびとは、あすの命さえわからず、ゲートルやもんぺすがたのまま、防空壕の中に息をこらしていた。爆撃のたびに、火たたき・バケツ・砂袋などを手にして、ひっしの防火作業をつづけたものである。

しかし、一機のB 29 が、爆弾・焼夷弾あわせて、五トンから十トンもの鉄塊を、つぎつぎと頭上へぶちまけていくのだから、たまったものではない。しかも、よせてはかえし、かえしてはよせるあら波のように、休むまもなくせめよせる波状攻撃であり、子どもから老人まで、ひとりのこらずしらみつぶしにしようという、おそるべき皆殺し作戦なのだ。

四十年ぶりの雪は、まもなくとけてきえたが、一度焼かれた家は、もう二度と、もとのかたちにもどることはなかった。

家を焼いただけなら、まだ、おぎないもつくというものだが、しかし、うしなわれたひとびとの命は、永遠にかえってこない。いくら大声でよんでも、どんなにわめきさげんでも、かえってこない。手や足をひきさかれるように、それぞれの肉親をうばわれたひとびとが、くらい焼けのこりの町にあふれ、身も心もこごえるような北風が、どうっと横なぐりにふきつける……そんなある日の鉄工場から、この物語をはじめることしよう。

警報発令

風だ。

氷のかたまりのような風だ。

それが、隅田川の上を、すさまじい勢いですつとんでくると、あき地の砂ぼこりをまきあげて、石つぶてのように、トロッコのはらをたたく。

「隼」と、はくぼくで大きくかかれたトロッコは、ぐぐつと、身ぶるいし、苦しそうにあえぎながら、こきざみに進む。

じりじりと、進む。

鉄くずのスクラップを満載したトロッコは、黒光りするレールの上を、ひとりでにうごいているようだったが、よく見ると、そのうしろに、ふたりの少年がへばりついていて、渡辺杉夫と木村大三郎だった。

ふたりとも、防空ずきんですっぽりと頭をつつみ、国防色の服のむねには、大日本青少年団の赤いわかワシのマークと、国民学校（そのころの小学校）六年の数字と名まえに住所。それに、血液型をしるした合計三まいの布地を、勲章のようにつけていた。ものものしいかっこうだった。ほんとうは、作業中に、防空ずきんをかぶることは、耳がきこえなくなるので、あぶないとされているの

だが、このさむさでは、それどころではなかった。目にごみはいるし、ほおがちぎれてしまう。

「うんしょ。」

「うんしょ。」

と、火のような息をはいて、両のうでに、満身の力をこめる。

足をふんばる。

と、そのとき、運動ぐつのつまさきに、ぼとんと一つ、小さなしずくがおちた。

あれ、なんのしずくだろう。雨ではないし、あせだろるか、鼻水だろるか。杉夫は、くっきりと目をひらいてから、大きくまばたきした。いや、なみだなんかじゃない。男は、どんなことがあっても、なみだなんか見せちゃいけないと、学校の先生もいつている。そうだ、神風特別攻撃隊の勇士たちは、爆弾をかかえて、愛機もろとも敵艦へぶつかっていくんだ。それを考えたら、このくらのことで、負けちゃいけないぞと思う。

「ああ、指さきもぎれそうだ。」

なきそうな声でいう大三郎の声をさえぎって、杉夫は、ぎょろっと目をむきだした。

「なんでえ、だらしねえなあ。男だったら、さむいくらいで、くよくよすんない。」

「男だって、さむいもんはさむいじゃんか。」

と、大三郎は口をとがらす。

「さむくたって、死にやしないよ。」

「そいだって、食うもん食わなくちゃ……。」

「食わないのは、おたがいさまときた。」

「おれ、力が出ねえなあ。機械だって、油いれなきゃだめになっちゃうもんなあ。」

「そんなへぼ機械、スクラップといっしょに、溶鉱炉へいっちまえ。」

「へっ、やなこった。」

すねたようにいう大三郎の足の下で、かた雪が、ギョンとなった。雪は、日かげのところだけ、まだとけずにのこっていたのだ。

それからふたりは、だまってトロッコを押した。川ぞいのあき地をすぎて、機械場の建物のかげにはいると、北風はさえぎられたが、そのかわり、道はのぼり坂にかわった。このほうが、もっとつらい。いよいよ、溶鉱炉のさいごの急坂へむかうのだ。

杉夫は、ぐくんとなまつばをのみこんでから、ひくい声に力をこめていう。

「いくぞ。」

「しゃあねえ。」

すてばちな大三郎の声だった。

トロッコのわきから、首をつきだしてみると、二本のレールをふかくすいこむところに、防空彩色のほどこされた鉄の溶鉱炉が、巨人のようにそそり立っている。パーンと音をたてて、まっかな火花が空中にふきあがった。と見るまに、あたりいちめん、金粉のようにひろがる。何回見ても、ものすごい感じだ。

杉夫たちのはこぶスクラップは、あの炉の中で千六百度からの高温で溶解され、「湯」と名づけられたまっかな銑鉄は、ここから、第二工場へはこばれて、手榴弾の外皮とかわるのだ。

杉夫は、顔をあげなかった。大三郎もおなじだ。ふたりは、ひくく頭をおとして、つまさきだけ

を見つめながら、一步また一步と、トロッコをおしていく。ぐいぐいと、おしあげていく。

「それっ、それっ！」

杉夫の口から、白い息のかたまりが、せわしなくはきだされる。

大三郎の顔も、まっかだ。ふみしめる足が、こきざみにふるえている。ありったけの力をふりしぼっているのだ。四本の手にささえられたトロッコは、ゴトゴトと重いひびきをあげて、これまた、せつなそうに進む。

「力、ぬくな。」

杉夫は、さげんだ。

「ぬいたら、トロ、おちてくっぞ。」

「なんだか、すごく重いな。」

「なに、これっぽっち。」

「うん、だいじょうぶ。」

ひっしにうなずいた顔から、あせの玉がとぶ。

杉夫は、目の玉だけをうごかして、すばやく大三郎の横顔をとらえた。防空すきんにさえぎられて鼻さきしか見えなかったが、はあはあとイヌのようにあらあらしい息。これはただごとではない。

大三郎は、名まえのわりに小がらで、色も白く手足もほそく、「小三郎」というあだ名がある。

そして、ときどきみょうなことをいう。日本は、負けるんじゃないかと、いくら日本晴れの天気でも、アメリカへいけば「アメリカ晴れ」だろうとか。からだもあまりじょうぶでないせいか、すぐよわ音をはくのだから、心ほそいといったらない。つい二、三日前も、ちょうどこのへんで、鼻

血をふきだしたんだっけ……と、杉夫は、不安にまゆをひそめる。

と、まさにそのときだった。

ひとのことを考えていて、気がゆるんだのか、ふみしめた左足が、ずるっと、こおりついた雪の上にすべったのだ。あっというまもなかった。杉夫は、トロッコのふちに両手をかけたまま、がっくりと、ひざをおとしてしまった。

ああと、大三郎のひめい。

トロッコは、いっしゅん、レールの上に棒立ちになったと見るまに、きゆうに怪物のようになって、ぐらぐらと目の前へのしかぶさってくる。大三郎が、力いっぱい右かたでささえたが、そのくらいではどうしようもない。

「ひえっ！」

杉夫は、目をつぶった。

てっきり、トロッコにおしつぶされると思ったのだ。すくみあがるような思いで、一、二とかぞえ、三までかぞえて、ふっと目をひらいてみるとこれはまた、どうしたことか。トロッコは、なんのこともなかったように、そっけなく鼻さきにとまっている。その車輪とレールのあいだに、木の「くさび」がうちこんであった。

まさかのときのために、いつもトロッコの車体に用意されていたくさびだ。それを、とっさになげいれたとは……大三郎にしては、できすぎた手なみだった。

大三郎は、まくら木にすわって、ひたいのあせをぬぐっている。そのからだは、なんだか、ひとまわり大きくふくらんで、えらそうに見えた。

杉夫は、ほんと息をついて、

「おれ、どうなるかと思ったよ。大ちゃん、なかなかやるんだな。」

「そりゃ、男だもん。」

えへんと一つ、思わせぶりなせきばらい。

杉夫は、ちっとしたうちして、

「あれれ、おまいのほった、ほしがきみたいに白い粉ふいてらあ。」

「ほしがきだって、鼻水よりかは、ましだわい。」

「鼻水？」

「杉ちゃんのさ。」

「ばかいえ。」

杉夫は、むっとしてきりかえした。

「こりゃ、あせちゆうもんだ。きまつてるがな。」

「あせ、鼻のあなから出るか。」

「出るさ。あたりめえよ。」

「じいさん、ばあさんならな。」

「ちょっ、ちょっ、だまれ。なんか、へんな音がきこえるじゃねえか。」

杉夫は、大げさに顔をしかめて、防空ずきんから、かた耳をつきだした。

ひたひたとながれる隅田川のむこう岸に、まっ黒なガスタンクが二つ。そして、おむすびのかたちをした雲。雲は、すいついてしまったようにうごかない。かすかに、動物のうなりにもにたひび

きが、その雲の下から、風にのってやってくる。

「きた、きた！」

杉夫は、パチッと指をはじいた。

「B 29のおでましだい。」

「しめしめ、大もうけ。」

大三郎のすきとおるようなほおに、たちまち、血の気がさした。

もう、そのときには、あちらこちらのサイレンが、さきをあらそって、いっせいにほえはじめた。杉夫がききつけた警戒警報は、ガスタンクのさきの、防空監視所のサイレンだった。

警報とどうじに、六年生の子どもたちは、臨時の勤労学徒として、すぐ家へ避難できることになっている。とくに午後の警報のばあいには、もう工場へもどる必要がないのだから、よろこばずにはいられない。いわばB 29さままだった。そのB 29は、毎日のようにやってくるから、「定期便」ともよばれ、おかげで杉夫たちは、ほとんど一日おきくらいに、家へとんでかえることになる。

「では、ご帰還あそばさるか。」

うひひ……とわらって、トロロコをそこにおきざりにしたまま、ふたりは、鉄砲玉のように、レール道をかけおりた。

工場の門を出たところで、またもや、つぎのサイレンが、とぎれとぎれになった。空襲警報だ。このちょうしだと、敵はいがいに近いところにいるらしい。

弁当箱一つをこわきにかかえて、ふたりは、まっしぐらに、白い舗装道路をはしった。

どんなことがあっても、この弁当箱だけははなせない。中に、給食ののこりが、はいっているからだ。それは米二割、むぎ五割、ダイズ三割という、ものすごいぼろぼろめしだったが、これだっておかゆにすれば、そうとうにふくれあがる。家では、そのぶんをちゃんと計算にいれて、夜の雑炊をつくるのだ。

「けむりを出さないでください。白いせんたくものは、とりこんでください！」

そんな声が、大通りにまではみだしてくる。敵の目にふれるものを注意しろと、いつているのだ。空襲警報とどうじに、防火貯水槽のたちならぶ歩道は、きゅうに気ぜわしくなった。黒服の警防団員が、とびぐちのさきで、けんめいに貯水槽の水をわっている。氷がはっついては、まさかのときに役にたたない。あつさ十センチもある氷のかたまりが、ぶつかきのように路上にはうりだされた。通行人も足をはやめ、通りをはしる自転車まで、チリリンとすずの音もあざやかに、風をきってとんでいく。

「そんなに、あわてくさるなって。」

杉夫は、はしりながら、苦しそうにむなもとを右手でおさえた。

「だって……。」

と、大三郎は口ごもる。

意地っぱりは、それでも、はしるのをやめない。

「どうせ、Bこうは一機だよ。」

「一機？」

「うん、さつき工場の門ところで、兵隊さんがそういった。」

「その一機が、あぶないのさ。」
と、大三是郎はいう。

「みどり屋のおやじさんなんかな、爆弾の破片がとんできて、ぶつうーんと、鉄かぶとの右から左へつきぬけちまったんだぜ。」

「へえっ、それで？」

「頭、おかしくなっちゃったさ。」

「よく死ななかったな。」

「死ななくたって、頭のねじがゆるんじゃ、どうしようもないさ。」

「そりゃそうだ。けどな、生まれつき頭がかったるんでは、どうする？」

「そんなの、しらん。」

大三是郎は、はしりながら、ふきげんに口をつぐんだ。じぶんのことをいわれたものと、とりちがえたらしい。

北風は、やみそうになかった。

どうって、砂ぼこりをまきあげてきて、目の前が黄色くかすみ、口の中がざらざらになる。電信線が、キューンとはじける。はじめのうち、せわしなくはしっていた大三是郎も、いつかおくれがちになった。さすがに、息苦しくなったのだらう。で、杉夫もはしるのをやめて、右目をこすった。目のふちのごみをぬぐって、なにげなく指先を見ると、ほこりがべっとりついていて。ああ、ぼくの顔、こんなによごれているんだと、あらためて気がついた。

でも、一日じゅうあの鉄工場で、鉄と油にまみれているんだから、黒くなるのもしかたないさと